

が知らないままに地獄の炎で焼かれることから救い出すことが「焦眉の急務」だったので。そして改宗した人たちは、地獄から救われたことへの喜びからか、あるいは二度と地獄に落ちないためにそれこそ声を張りあげて讚美歌を歌ったでしょうね。

§15 讚美歌は簡単に受け入れられたのか

— アンドリュウのように志願してきた若者を海外伝道団が宣教師として海外に派遣した。彼らは地獄に落ちる魂を救うために昼夜たがわず働いた。その結果、讚美歌が広く普及することになった。ということでしたが、讚美歌が普及する以前には現地にはまた別の音楽というか歌は当然ありましたよね。

もちろんそうですね。宣教師側から見れば土着の音楽、今日の言葉で言えば伝統音楽とか民族音楽という言葉で呼ばれている音楽ですね。

— 改宗するということもそうですね、古くからある自分たちの音楽を讚美歌と簡単に交換してしまったのですか。

そこら辺りが重要なことですね。結論から言いますと、どうも簡単に交換したみたいですね。日本の場合でもわずか百年ばかり、二世代くらいで簡単に音楽がすっかり西洋化してしまっていますね。

— そのお陰で今私たちは讚美歌を聞いても少しも違和感を覚えませんが、百年前

の日本を想像しても分かりませんが、同じ頃のミクロネシアですか、そういった島々も同じだと想像出来ますが、彼らが普段親しんでいた音楽と讃美歌とは随分違った音楽だったのでしょうか。

そうだと思います。

——だとしたら、どうしてそう簡単に入れ替わってしまったのか不思議です。音楽文化というのはそんなに変わりやすいものなのでしょうか。彼らが普段親しんでいた音楽と讃美歌とがもしもあまりにも違った音楽だとしたら、なぜそんなに簡単に讃美歌を受け入れたのだろうか、普通なら、奇妙とか、理解出来ないとか、不思議とかそういう感情が起こって、なかなか受け入れないのじゃないかと思うのですが、どうなんですか。

彼らが普段親しんでいた音楽、昔からずっと親しんで来た音楽と讃美歌とを簡単に入れ替えたことにはいくつか理由が考えられます。

一つは、それが宗教音楽だったからでしょう。一度キリスト教に改宗してしまうと、讃美歌は唯一の適切な音楽ですから、古い宗教に関わる諸々の物品を廃棄して用がなくなった古い音楽は廃棄したと考えられます。もう一つは、新しい文明の魅力です。文明の力に魅了されたということが考えられます。そのいい例がオルガンです。

日本では足踏みオルガンという通称で知られています。正式にはリードオルガンと言います。日本では今ではピアノに変わってしまいましたが、数十年前までは、



折りたたみ式リード・オルガン
同志社女子大学史料室所蔵

私たちが子供の頃は、学校の歌の伴奏の主役はピアノではなくオルガンでした。今でこそオーディオ機器が発達していますので、オルガンの音に驚くことはありませんし、とりたてて魅力だと感じないかもしれませんが、百年以上も前ですと、あの小さな箱からああいった音色と音量が出るというのは、日本人も含めて、現地の人々には新鮮な驚きだったし、魅了されたわけです。ある日本人なんかは、まるで俗界の塵芥から離れて桃源郷に迷い込んだ心地がした、という感想を残しています。

面白いことはですね、宣教師はよく必需品の一つとしてオルガンを任地に携帯します。ピアノだと無理ですけど、オルガンですとちよつと大きなトランクくらいで運べるんですね。そして任地でオルガンを鳴らして讃美歌を教えます。その魅力によって現地の人たちが讃美歌を覚えていきます。日本でも明治十年代後半から特に女子ミッションスクールの生徒数が急増しますが、オルガンの魅力に大きな原因があったことが分かっています。

——今オルガンの魅力を強調されました。その魅力もあって彼らにとって新しい歌である讃美歌が普及したというお話でしたが、それによって彼らの古い歌は捨てられたのですか。廃仏毀釈のように。

その質問にちょうど良い例があります。先日サモアという所に行ってきました。南太平洋に浮かぶサモアは西と東では別々の国で、西サモアは独立国ですが、東はアメリカン・サモアといってアメリカ領です。私が行ったのはアメリカン・サモアの

方です。

その住民といいますが島民はほぼ百パーセント、クリスチャンです。彼らは教会を中心に社会生活をしています。彼らの生活は教会を中心に動いていると言っていると思います。その教会に行きますと、礼拝で素晴らしい讃美歌の歌声を聞くことが出来ます。それはすでに有名なことで、いわゆる混声四部合唱で実に美しい声で、とても声量のある合唱が聞こえます。

私ははじめて実際に聞きまして、一瞬自分はオペラハウスにいて、オペラの中の合唱が沸き起こったのかと思っただくらいでした。この合唱の起源は十九世紀に島に伝わった讃美歌にあるわけですが、私も同じ疑問を持ちまして、教会に案内してくれた人が現地のコミュニティーカレッジ、日本で言えば短大で音楽を教えている若い先生で、彼に聞いてみました。

「サモアでは古い音楽はどうなったのか？ キリスト教宣教師が讃美歌を持ってくる以前にあった古い音楽は今どうなっているのか？」

彼ははっきりと「分からない」と言いました。宣教師がやってくる以前の音楽がもう残っていない、というのです。もう私たちはそれについて知りようがない、と。

今私たちが歌っているこの合唱が私たちの音楽なのだ、と。そんな風に言っていました。小さな島ですので、古い音楽が伝承されずに、その代わりにキリスト教の讃美歌、あるいはそれから生まれた新しい教会音楽だけが島に残っているのです。

日本ではここまでのことは起こりませんでした。小さな島では日本で起こったことがもつと荒々しい、暴力的とても言いたくなる形で起こっていると感じました。讚美歌を歌うようになると古い歌が廃れてしまふ、そういう歴史が起こったのではないかと思われまふ。そのことを分かりやすく表現するために、私は讚美歌以前と以後とはアジア太平洋の音楽史に活断層のように亀裂が走っている、と言っています。

§ 16 土地の古くからの歌との関係は

—それはまた随分悲劇的なお話ですね。

サモアの人たちはそれは考えていないようです。自分たちの特徴は柔軟性にあると言っていました。外国の文化を受け入れるけれど、それを自分たちに合うように改良していると。結局、私たち日本人と同じことを言っていると思いませんか。日本の場合も、そうは違わないと思います。言語は日本語が残りましたが、音楽は日本音楽が残らず普通の生活ではほぼ西洋音楽になってしまったのではないのでしょうか。今の若い人たちが歌っている歌を明治の人たちがもしも聞くことが出来たら、日本人だとは思わないと思いますよ。

—でも幕末の顛末なんかを見ますと、やはり西洋列強の強力な圧力を前にして変